福井県立若狭歴史民俗資料館 企画展

伴 信友

わが国近世考証学の泰斗

▲伴信友肖像（伴信夫氏蔵）

平成３年６月４日～６月30日

記念講演

平成３年６月23日(日)・当館講堂にて

講師　皇學館大学学長 谷 省吾 先生

演題　伴信友先生に学ぶもの

ごあいさつ

私たちの畏敬する碩学伴信友翁の偉大な業績を回顧して、「伴信友展」を開催します。

翁は小浜藩士山岸氏の出です。現在の若狭高校々庭あたりに生れ、小浜藩校の順造館に通学されました。江戸の藩邸に仕える伴氏のあとを継ぐために、上京されましたが、その後も藩主と共に、しばしば帰国しておられます。

ところで、小浜藩からは、江戸時代に、数多くの篤学者が輩出しております。これを三大家に縮めれば、蘭(らん)学を学び、前野良沢等と共に「解体新書」を翻訳された日本の近代医学の祖である杉田玄白、それから本居宣長、春庭の研究を発展させ、用言の活用、「てにをは」、音韻などについての画期的な研究を残された東條義門、この三大家と伴信友翁ということになります。

当館では、昭和63年の夏、杉田玄白（―日本近代医学の先駆者たち―）展を開催しています。だから、この「伴信友展」はそれに続くものとなります。

本展開催にあたり、貴重な資料をご出品いただき、また、絶大な協力をして下さった各位に、心からお礼申し上げます。

福井県立若狭歴史民俗資料館長　山　本　和　夫

伴信友関係略年譜

西暦	年号		事項
1773	安永	2	若狭小浜の竹原的場前(現、若狭高校敷地内)の山岸家に生まれる。
1786	天明	6	小浜藩士伴信当の養子となり、翌7年江戸屋敷の伴家に移る。
〃	〃	〃	妙玄寺（東条）義門生まれる。
1788	〃	8	御広間面番御当分御雇となり、以後小浜藩士として仕える。
1790	寛政	2	稲庭正義著「若狭国志」を雇人に写させ、以後多く加筆増補する。
1794	〃	6	伴信当の娘美尾（14歳）と結婚。
1798	〃	10	本居宣長「古事記伝」全44巻完成。
1801	享和	元	本居宣長に入門申し入れのことを村田春門に仲介依頼。
〃	〃	〃	本居宣長没。その養子本居大平の配慮にて宣長没後の門人となる。
〃	〃	〃	杉田玄白「養生七不可」を印刷し、知友に与える。
1805	文化	2	本居大平の紹介にて平田篤胤初めて信友を訪問。
1806	〃	3	小浜藩主酒井忠貫没、忠進藩主となる。
〃	〃	〃	実父山岸惟智没。養父伴当信没。伴家の家督を相続する。
1808	〃	5	杉田玄白宅にて大槻玄沢に会う。
〃	〃	〃	藩主酒井忠進京都所司代就任。信友京都堀川へ引越しを仰せつかる。
1811	〃	8	長女八十小浜藩の奥医師小杉玄民の長男小杉玄適と結婚。
1814	〃	11	8年より東寺文書の若狭関係記録を書写し「東寺古文零聚」編集。
1815	〃	12	藩主酒井忠進老中となる。信友江戸牛込屋敷へ移る。
〃	〃	〃	杉田玄白没。
1821	文政	4	隠居。長男信近家督相続。以後専ら学問に精励し、著作活動を継続。
1823	〃	6	妙玄寺義門の古今集講義に出席。義門、信友を訪問し「友鏡」解説。
1825	〃	8	二十数年前から考究を重ねた「若狭旧事考」成稿。
〃	〃	〃	ロシア漂流より帰国の大黒屋光太夫を訪ね「光太夫譚」を記す。
〃	〃	〃	「鈴屋翁略年譜」案文できる。翌文政9年完稿。12年に刊行。
1828	〃	11	藩主酒井忠進、江戸邸にて没。
1837	天保	8	妻美尾没、江戸大願寺に葬る。
1843	〃	14	妙玄寺義門没。信友直ちに遺族に追悼歌を送る。
〃	〃	〃	京都所司代就任の藩主酒井忠義に従い江戸出立。翌年正月京都着。
1846	弘化	3	10月14日、京都所司代官邸にて没。18日、小浜の発心寺に葬られる。

伴信友に就いて

山本和夫

1

伴信友は、今から二百十八年前、安永二年（1773年）の二月二十五日、小浜に生れた江戸時代晩期の国学者です。

▲伴信友翁之碑（発心寺）

その記念碑は、小浜市伏原の発心寺の裏山にあります。

江戸時代の国学者の代表、すなわち四大人は、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤、とするのは、一般ですが、平田篤胤よりも、伴信友は、ぐっと優れた学者だったと、川瀬一馬博士が、五島美術館の「国学者展シリーズ」で、力説しています。信友は、それほどのすぐれた学者です。だから、この四人に契沖と信友とを加えて、江戸時代六大人にすべきだという説もあります。

が、一般的には、信友は平田篤胤、香川景樹、橘守部の三人と共に「天保の四大家」と称されています。

2

私たち、若狭をふるさととするものは、伴信友を、同郷人として、たいへん、親しく感じ、そして畏敬しています。

信友には、たくさんの著書がありますが、私たちにとって、一ばん、うれしい著作は、「若狭旧事考」です。　この本には、「若狭の国は、どうして、ワカサと名づけられたか」ということを、詳しく説明してあります。

「この国（若狭）にあずかる古事のはじめて書に見えたる趣を考えるに」

と、先ず述べてから、

「景行天皇の御世、カシワデノオミの遠つ祖、イワカムツカリノミコトに、この国をたまいて、子孫世々に領したりけるが、履中天皇の御世、余磯というに、ワカサクラベ（稚桜部）という嘉号を、たまいけり。故その稚桜てう称をやがて国名におおせて、ワカサ（和加佐）と呼びたりけむが……」

と、「日本書紀」の履中天皇の条をひっぱり出しています。

ことわるまでもないけれど、日本書紀は、日本最初の勅撰の歴史書で六国史の一つです。

信友は、日本書紀の存在を、大切にして、若狭という国の名の起りも、この歴史書に書いてあるとおりだとしています。

信友は、本居宣長系の学者です。本居学は、伝統を否定せず、伝統によって歴史的思考をすすめる学系です。信友が、日本書紀の存在を重大とするのは当然です。

3

さて、信友の指摘する履中天皇の条に、うれしいハプニングが記してあります。

――それは、履中天皇の三年の冬十一月六日のことです。旧暦ですから、十一月は、すでに冬にはいっています。

だが、その日は、小春日和だったのでしょう。

二上山の空には、のびのびと、太陽が、いねむりしていたのでしょうか。

天皇は、皇居のほとりにある池に、両枝船を浮かべてパーティーをひらいていました。

風雅なことです。

大和朝廷の貴族たちは、グルメ族です。

その日。カシワデノオミ（膳臣）の余磯が、日本海の美味しい海の幸をはこんできたので、グルメ族は、パーティーをはじめたのでしょう。

その頃、料理に使う塩は、若狭から運んだものです。グルメ族の舌は、現在の人よりも、味に敏感のようでした。塩さえも、品選びしたのでした。

天皇は、ほくほく。日本海の海の幸を運んできた余磯を近くに呼んで、

「日本海の魚は美味しいのう」

「はい、はい」

余磯は、酒をお注ぎしました。

「手づくりでござります。」

その時です。冬だというのに、さくらの花びらが、はらはらとまってきて、天皇の盃に浮びました。

雅びの天皇は、

「ほう、さくらの花びらじゃ」

「何か、よいことが、おこります前兆でござりましょう」

よろこんだ天皇は、即座に、

「皇居の名を、ワカサクラ（稚桜）の宮と改めよう。そして、カシワデノオミよ。おまえは、稚桜部臣、じゃ」

信友はこのことを、こう書いています。

「いま、その時のさまをおもい見るに、かの天皇の御船遊は、霜月六日なりければ、今のヨ（俗）に小春と云うらむ和暖なる節、御遊宴のおりにあいて、桜のかえりばな（復花）の開きたりけるが、散り来て、余磯が献れる御酒の御盃に落ち浮びたるなりけり。故に此趣をめずらしと歓賞興し給い、その花をワカサクラ（稚桜）と賀稱（ほめたたえ）て、やがて、磐余の大宮の名とし給い、又、余磯には、姓の外に、別に、稚桜部という嘉号を賜いたるなり。」

このうれしい故事が、「若狭の国の生れる原因」となりました。

4

信友は、この歴史的な話を説くにあたり、単に、歴史を考証するだけではなく、「若狭は、このように、風雅な原因を持つ美しい国だよ」と誇り高々です。愛郷心の故です。信友の胸の高鳴りが、二百年もたった後にも、私たちの胸に伝わってきます。

信友は、前述の如く、安永二年生れですが、生誕地は、現在の県立若狭高校の敷地内の一隅です。

父は、酒井家に勤め、御馬廻百六十石の山岸次太夫惟智で、母は、同藩士片岡良雄次女さよ。

彼は、その四男坊です。

その通称は、はじめは鋭五郎でしたが、後に州五郎と改めました。初名は惟徳です。

そして、その号は「特（ことひ）」です。時には「事負」とも書きました。

号とは、本名以外につける名です。雅号ともいい、ペンネームとも。

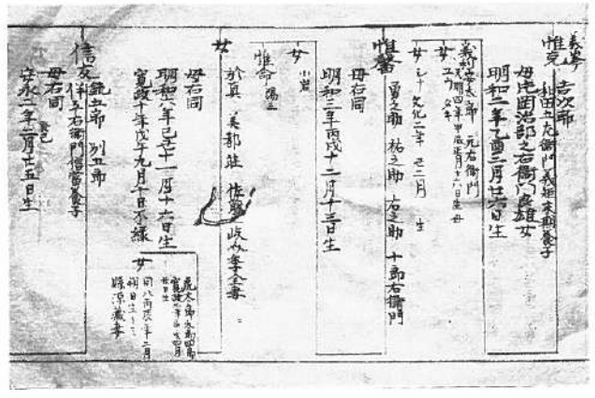
信友のこの「特」あるいは「事負」は、信友の性格を、端的にあらわしていると、私は興味深く思います。

「特」は、ことい、俗に、コッテ牛のことのようです。

道歌に、

おこたらず行かば千里の末も見ん　牛の歩みのよし遅くとも

と、いうのがあります。歩みはのろくとも、のっこ、のっこと、千里の道（遠い道）を歩いて疲れないコッテ牛。信友は、そのような、――コッテ牛になりたいと思って、この号をつけたのでしょうか。



▲山岸氏系図（小浜市立図書館蔵）

また、「事負」は、特と同音で

す。

これは徳川家康の遺訓を連想して考えつかれたのでしょうか。

（人の一生は、重荷を負いて遠き道を行くが如し、急ぐべからず）

この「重荷を負い」が、ことおい（ことい）です。

この特、事負という号は、信友の一生を通じた人生観でした。

その頃、小浜藩の学校は、江戸には講正館があり、小浜には、順造館がありました。

この「コッテ牛」は、八歳になると、先ず、順造館に、のっこ、のっこと通うことになります。

ところで、江戸の講正館と、若狭小浜の順造館とは、兄弟校である故、両校は、盛んに交流していました。

だから、小浜の順造館は、地方にあっても、江戸の空気が流れていました。信友の学問の目は、順造館入学の日から、ぱっちりと開きます。

が、十四歳の時、江戸の小浜藩に仕える伴平右衛門信当（御勘定頭六十石）に、男の子がなかったので、四男坊の信友は、婿養子に迎えられることになります。

そして、その翌年、天明七年（1787年）に、彼は養家に移り、江戸に住むことになります。

江戸に移れば講正館に転校です。

――が、十四歳まで、信友は、若狭で過ごしたのです。

人間の性格が、確定する幼年期、少年期を、信友は、若狭ですごしたのです。その間に、「若狭を愛する心」が、全身に、みっちりと、満ちての後の江戸行なのです。

「若狭旧事記」は、若き日に蓄えられた郷土愛の、学門的放出だったと、いえるでありましょう。

5

信友が、若狭を去ったのは、天明七年の三月二十一日の朝でした。

木曽路を通って江戸に出ました。

江戸には六歳年上の兄惟重が、江戸の小浜藩邸につとめていたので、一先ず、そこに落ちつくことにしました。木曽路は水害で、橋が落ちたり、道がこわれたりしていたので、思わぬ日数がかかり、兄の家についたのは四月六日の夕方でした。

こうして、信友は江戸の藩邸に出仕する伴家の婿となりました。

そして、その翌年の天明八年六月二十四日に、藩の奥老役伴信当の息子として、御広間面番を命ぜられます。

また、しばらくして、若殿酒井忠進の御供番子役となりました。

――さて、江戸にあらわれた信友の心は、若鮎のようにぴちぴちと弾んでおりました。

江戸の小浜藩邸に就職したうれしさだけではありません。

実をいえば、養父の伴平右衛門信当は、僅か六十石の小身の武士です。

その頃は、さむらいの禄高は、血統によりました。小身者の家に生れたら、何か、事件でも起こらねば、そのままです。

信友の生れた山岸家は、百六十石でした。伴家は六十石です。何とも小身の武家です。

だから、信友がぴちぴちと心を弾ませたのは禄高のことではありません。

信友にとっては、江戸は「学問の入口」だったからなのです。

江戸の藩校には、儒学者で詩人の山口菅山がいます。オランダの医学書の人体解剖書を翻訳して、日本医学の新世界をひらいた杉田玄白や中川順庵がいます。

信友の時代は、江戸時代の晩期でしたが、それだけに、江戸文化が爛熟して、画家、文人、詩人など、新井白石をはじめとして、多士済々でした。

その名士たちと、あるいは学び、あるいは交ることができるのです。これが、信友の心をわくわくさせる原因でした。

ところで、小浜藩の学問の系統は、初代酒井忠勝の時代から、江戸幕府の方針に従って、林羅山の朱子学を本すじとしました。二代目の忠直は、林家のすいせんで、千賀玉斎を小浜に招き、三代目の忠隆は、江戸で林家の儒学を学んだ松浦庄蔵を、四代目忠囿は牧田近俊を、というふうでした。

もっとも、七代目の忠用は、朱子学でもちょっと外れる崎門学を取りいれましたが、とにかく、学問といえば、儒学を、世界最高の学問としました。

いわゆる漢学万能でした。

ところが、この漢学に反抗する学問が、その横に伸びていました。すなはち、荷田春満、賀茂真淵などの国学が拡がりはじめていました。

賀茂真淵の学をうけついだ本居宣長が、その中で、光っていました。

信友は、若狭の順造館で、みっちりと、まず朱子学の講義を享受したわけですが、江戸の新風を、からだに受けとめると、漢学から離れ、国学への道を進むことになります。

しかし藩士としての勤務を怠ったわけではありません。

コッテ牛のこのさむらいは、昼は、真面目に儒教を尊ぶ役所へ通い、夜は必死に国学を学問したのです。

夜、眠くなるのを防ぐために、頭の上にぬきみの日本刀をぶらさげていたとも、いわれます。

コッテ牛の思想は、強く、鋭かったのでした。

国学の奥義をきわめながら、信友は藩主九代酒井忠貫、十代忠進に、忠勤を励みます。

そのうちに、義父の信当が七十歳で没します。そこで、信友は文化三年（1806年）に家督を相続します。本知九十石、足高十石でした。それから六年たって、文化九年四十歳で、

百五十石を与えられ、近習者頭に任ぜられますが、これが、天下の大学者の待遇です。寂しいことです。

6

しかし、信友にとっては、禄高など、問題ではありません。学問の道に、ひたすら進むことを本懐としています。例をあげると、現在小浜市立図書館にある「東寺古文零聚（れいしゅう）」の執筆の時のことです。

この編集には、文化八年四月から十一年二月まで三年間かかりましたが、

「汗がながれる真夏の昼間、はだの凍える夜になっても厭わず」

と、努力したことを告げ、「我ながらよくやったものだ」と述懐しています。コッテ牛の努力です。

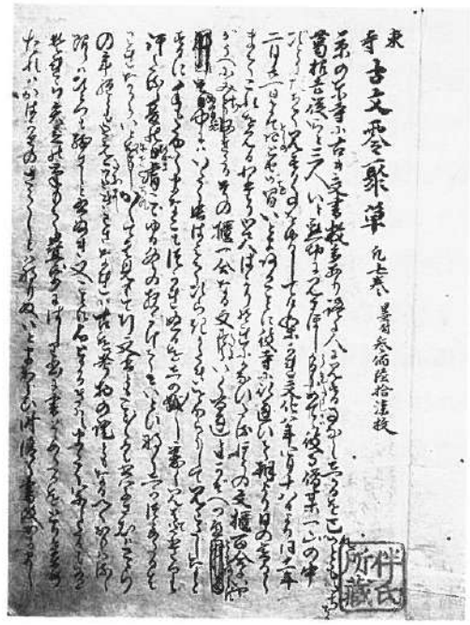
信友は、七十四歳で亡くなった時、辞世を残しました。

いまはにはなにをかいはんよの常の
言ひしことばぞ我こころなる

これは、生きている間に、総てを尽くした人のみが、いえる言葉ではないでしょうか。

信友は、墓の中で

「我ながら、よくやったものだ」



▲東寺古文零聚（小浜市立図書館蔵）

と今も呟いているような気がします。真実のコッテ牛の道を、信友は歩いたのです。

コッテ牛あるいは事負の道を換言すれば、『幅広き真摯な道』です。

7

この、真摯な道に就いていろんな人が説いています。

川瀬一馬博士が、「伴信友、その生涯と業績」のはじめに、

「大正の初年、小学校四年生の時と思うが、修身の教科書に「伴信友は、若狭の小浜の人なり」という書き出しで、信友が少年の頃、みずから寒中に冷水を浴びて弱い身体を鍛え、後に藩主に仕え、立派な学者になったという話が載っていた。今になって思えば、少年の頃からの信友の意志の強固さが彼の学問の研究を成就させたのである。真の学問の研究を成し遂げるためには、何よりも意志の強さ――理性の働きの徹底さ――がなければならぬ。理性のすぐれは、学問研究にとって最も大切な要素である」

と、信友の性格に就いて語っています。

（――意志の強さ。）

これは、信友の生れた時からの性格だったといえます。

しかし、彼の身体（からだ）のひ弱さから、それを心配する母の願いが、さらに、一層この強い性格に育てたのかも知れません。

号を、コッテ牛のようにと「特」をつけたのも、母の教育の故かも知れません。

信友は、幼い時から体が弱いというよりは強くなかったようです。しかし、彼には、別に痼疾はなかったようです。

八歳で、藩の順造館に入学しましたが、感冒っぴきのほか、休んだことはなかったようです。

もっとも、彼は武士の子です。

武士は「いざ鎌倉！」ってことがあります。

だからふつうの百姓よりも、身の強さをねがって、母はひ弱といったのかも知れません。

そのために、修身の教科書にあるように、朝、冷水まさつをしたり、木刀を振ったり、駈けたり、いろんな健康法をやらされたのかも知れません。

とにかく、彼の体がひ弱だと心配しつづけたのは、母親でした。

信友が、伴家に移るために、若狭小浜を出発するとき、母は、しんみりといいました。

「あなたは、勉強が好きなのね。お母さんは、それがとってもうれしい。一生、勉強してね。でも、好きな勉強をしたいのなら、なによりも、身体を大切にしなければならないよ。からだが、丈夫なら、あなたは、何でも、なしとげられる才能のある子だと、おかあさんは思っているよ。」

この母の言葉は、信友には、一生忘れられない言葉でした。いつも、この言葉を思い出しながら、彼はひたすら、健康に気をつけたようです。だから信友は、江戸へ出てからも、重い病気には、とっつかまりませんでした。

ところで、信友は、あとには、江戸の国学者として一流の人となりましたが、しかし、藩主に仕える「武士」です。

文武両道の人でなければなりません。

だから、信友は、健康のためというよりも、武士として、剣道にはげみ、弓術にはげみ、また、二十八歳で、宮田景福から、越後流（上杉謙信）の軍学の皆伝を受けています。

この文武の「武」が、ひ弱な彼の健康を護ったといえましょうか。

武のうち、居合のけいこ、それから、朝、寝床を離れるまえの「深呼吸」。この二つは、「武」の根本であり、且つ、彼の健康の基となりました。これは、また「精神の基」でもあります。

事しあらば君の御楯となりぬべき

▲尋常小学修身書(巻四)・健康(信友図)

身をいたづらにくたしはてめや

と、歌い、また、

つかの間もわすれてあらめやつるぎ
　太刀　とりてつかふる武士の道

とも歌っています。

川瀬博士の「理性の働きの徹底さ」は、この歌に秘められているように思います。

ひ弱な体を護るためにと同時に、武士としての責任を護るために、

（先ず、意志の強さ）

が、要求されたわけです。この歌でそれが知れます。

彼は、江戸に出て、十六歳の天明八年（1788年）に出仕し（御広間面番）、それから、七十四歳の弘化三年（1846年）に京都の堀川所司代の邸内で没する（御側御記録係）までの永い間、無事に、藩士としての責任を十分に果たしました。

また、二十九歳の享和元年（1801年）に、本居宣長の門人となってから、本居学の研鑽をはじめ、遂に「天保の四大家」とたたえられる学問の主となりました。

この「文武両道の士」は、この意志の強さです。号の「コッテ牛」を思い出させます。感嘆のほかはありません。

8

ところで、信友の考証学などの著書述作に就いてですが、著書・編集の数凡そ百二十部三百二十巻、校註本三百十巻、その他歌集をも含めて七十六巻。まさに、汗牛充棟です。

この度、当館（県立若狭歴史民俗資料館）で、「伴信友企画展」を開催するのは、伴信友のこの著作活動をお知らせすることを目的としている催しです。

会場で、詳らかにそれを見ていただくことにしますが、今回の企画展に大きな協力をしてもらった伴信友研究者の大鹿久義氏に、「伴信友略記」があります。それをお伝えしましょう。

「現在、信友の自筆稿本・手沢本類は、宮内庁書陵部・国立国会図書館・静嘉堂文庫・東洋文庫・大東急記念文庫・東京都立中央図書館・福井県小浜市立図書館・京都大学附属図書館などに多く蔵されている。著書『神名帳考証』『神社私考』『瀬見小河』『中臣祓詞要解』『倭姫命世紀考』『高橋氏文考注』『松の藤廡』『長等の山風』『竹栄抄』『鎮魂伝』『神璽三弁』『若狭旧事考』『上野三碑考』『中外経緯伝』ほか多数、編輯に『古本風土記逸文』『逸各国神名帳』『東寺古文零聚』『武辺叢書』『義士流芳』『動植名彙』『遊古世』などがある。文政十二年の『鈴屋翁略年譜』が生前唯一の単行書であり、死去の翌年に『丹鶴叢書』外篇として『史籍年表』が上梓された。ついで嗣子信近により『比古婆衣』四冊、『仮字本末』四冊、『残桜記』二冊、『正卜考』三冊が出版。明治四十年（1907）―四十二年『伴信友全集』全五冊（国書刊行会）、昭和七年（1932）『伴信友家集』が公刊されている。」

また、その参考文献は、

「石田熊三郎『伴信友』（『新国学叢書』　十二ノ二）、森田康之助『伴信友の思想』、川瀬一馬・大鹿久義編『伴信友研究』（『伴信友全集』別巻）、川瀬一馬『伴信友―その生涯と業績―』（五島美術館『国学者展シリーズ』　二）、大鹿久義編『伴信友来簡集』（『国学研究叢書』　十二）、大鹿久義「（酒井家文庫）伴信友文庫関係書目」（『酒井家文庫綜合目録』所収）、山岸惟和「伴信友翁伝」（『伴信友全集』　二所収）、河野省三「（近世学界の権威）伴信友翁」（『神道研究集』所収）、森田康之助「伴信友の史学」（『神道学』１００）」、とあります。

9

伴信友の事業は、前述のように、文武両道でしたが、「文」の業績は、大雑把にいえば、鈴屋こと、本居宣長（1730年～1801年）の系統を、継ぐことだったとも言われています。

いうまでもなく、本居宣長は、江戸時代における国学界の名実ともに、その中心で、門人は、諸国に散らばり、四九三人を数えたといわれますが、この多くの門人の中で、抽んでているのは、伴信友と平田篤胤です。

▲本居宣長肖像(「図説本居宣長」より)

が、ここで、ちょっと、ことわっておきますが、信友は、本居宣長の没後の門人でした。

門人といえば、尊敬する人の謦咳に接したものをいいます。ところが、信友は、それが、残念にもできませんでした。

彼は直接には鈴屋の謦咳に接することはできなかったけれど、ずっと尊敬し、私淑していました。早くから憧れていたのです。

鈴屋の「古事記伝」の出たときは、寛政十年（1798年）です。その頃、信友は江戸で、御次頭役をつとめていて、慌ただしい毎日でした。が、心は「国学の道」に、すすんでい

ましたから、ひそかに、鈴屋の教えを、直接に受けたいと願っていました。しかし、直接に入門を願っては失礼と思い、そのチャンスを狙っていました。

ある日のことです。

いつも親しくしている和泉与市という本屋の主人と話しているうちに、彼と親しい村田春門が、鈴屋の高弟であることを知りました。

そこで、主人に、その人を紹介してもらい、宣長の門に入って教えを受けたいと願いました。

もちろん、村田春門は、こころよく承諾して、本居宣長に、手紙を書いてくれました。ところが、世は思うようにならぬというべきでしょうか。信友を紹介した村田春門の手紙が、宣長のところへとどく数日前、すなわち享和元年（1801）五月二十九日に、宣長は七十二歳で昇天してしまったのです。時に信友二十九歳でした。

そこで、本居家を継いだ本居大平（1756年～1833年）の愛情で、

―― 鈴屋没後の門人。

と、なったのでした。直接、教えは受けなくとも、その著書により、信友は間接的に教えを、ずっと受けていたのです。門人といっても、不自然ではないでしょう。

直接、教えを受けなかったとはいえ、信友は、いわば、同じ道を歩み、そして宣長没後は、その先を進んだのでした。事実、鈴屋の道を、誰よりも、正しく歩んだというべきでしょう。

村岡典嗣博士も、

「学びを全く宣長に委ね、その他の方面で、宣長の文献学を純粋に継承し発展させた」

と断言しております。また、川瀬一馬博士は、

「信友は宣長に私淑してその研究の本意を会得し、宣長のなし得なかった古代文化の研究方面を継承し、その志を果たしたといってよかろう」

と、述べています。

信友を絶讃した保田与重郎は、年を重ねてから、本居学に没入しようとした信友の生涯教育的な篤学性を讃え、そして、声を強めて、

「翁は、本居学での考証学者であると同時に、歴史に対する思想において、空前な日本の思想をうちたて、最も深い日本の臣民の歴史観とも言うべきものを建設したのだ」

といいました。

それを聞いていた私は、思はず呟いたものでした。

「伴信友の充実したあの大和心は、若狭を愛する、すなわち、信友の愛郷心が成長し、拡大したものだったと、私たちは考えたい。」

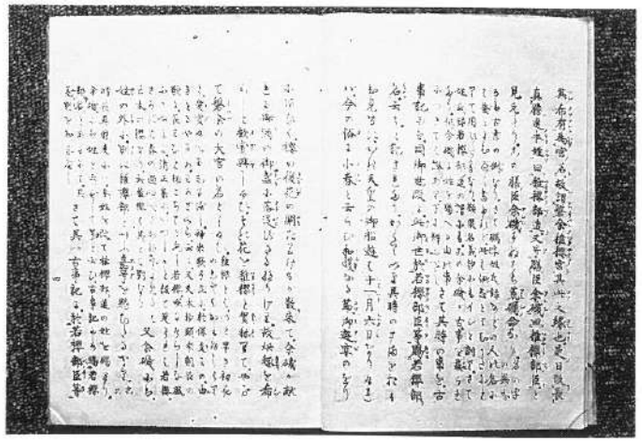
（当館館長）

展示品（一部）解説

「若狭旧事考」（目録No.10）

「若狭」の国名の起原を始め郡郷名などについて考究詳述したもの。享和元年（1801）に起草し、文政八年（1825）に成稿。その後も天保七年（1836）に追記（若狭旧事考跋文案詞）があるので、一つの研究にも実に長い年月がかけられていることがよくわかる。

ここには、信友は「若狭」の国名の起原として特に重視した「日本書記」の履中天皇巻の記事が紹介されている。

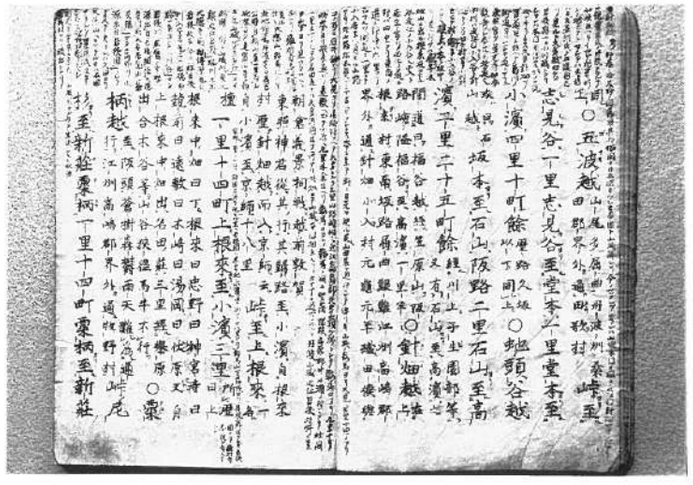


「かの天皇の御船遊は十一月六日なり。されば、今の俗に小春というらむ和暖かなる節、御遊宴のおりにあいて、桜の復花の開たりけるが散り来て、余磯が献れる御酒の御盞に落浮びたるなり」（前後略）、とある。

「若狭国志」増補本（目録No.21）

「若狭国志」は小浜藩の儒者稲庭正義が藩主酒井忠存の命によって著述したもので、寛延二年（1749）に完成している。牧田近俊または吉田玄倫が元禄年間に著わした「若狭郡県志」を多く参照して編述したと思われる。

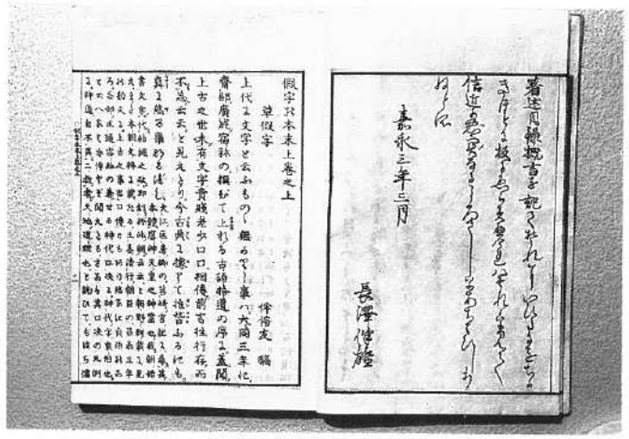
この両書は江戸時代の若狭の代表的な地誌であるが、信友の「神社私考」などにも度々引用されている。



信友は十八歳の時に人を雇ってこの「若狭国志」を書写してもらい、以来これを常に熟読活用したと思われ、傍注・頭注・脚注・はり紙など、大小合せて約800件にも及ぶ信友の綿密な注記が、主に朱筆を以て加えられている。

「仮字本末」（目録No.23）

草仮名・平仮名・片仮名などの起原・沿革について詳述したもの。また、平田篤胤などが主張したわが国の神代文字の存在を否定したことなど卓説が多い。今にして思えば問題や誤りも少なくないが、とにかく考証・推論の態度において時流をはるかに抜いたものがある、と高く評価されている。



この書は信友の没後、嘉永三年（1850）に刊行された。その初めに、「この仮名の本末は予が師伴翁の著されたる書にて」云々、という長沢伴雄の序文がある。考説に塵ほどの誤りをもなくすることは、生涯つとめても甚だ難しいから、出版して後悔することのないようにと、教えられた。しかし、遺稿を見たがる遠近の学者たちのため、また翁の志を世に示すため出版する、と述べられている。

「五倫教大意」（目録No.32）

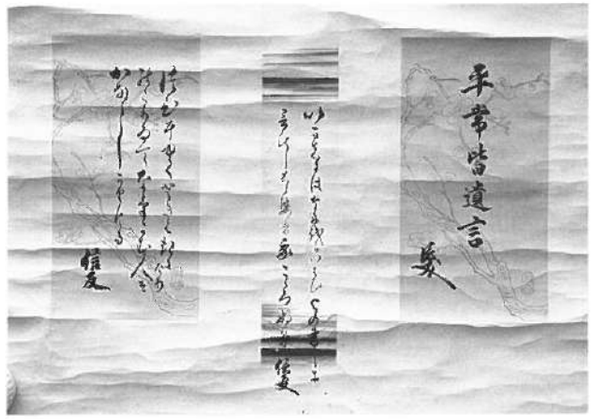
世間でいう五倫の道、すなわち人として守るべき五つの道のうち、特に大切な孝道を中心に説かれたもの。中山氏あてに書かれた草稿で、附記の見出しの言葉からか「孝道祭祀之事」とも称され、後に表装して附された題簽にもそのようになっている。

儒教では養育してくれた父母の恩に報いるために孝行せよというが、親子関係も他のいずれの道も、人としての本有の真心、子は父母を愛しく敬く思い、父母は子を愍し（かわいい）と思う、おのずからなる真心にもとづいて行われるべきものであることが、懇々と説かれている。

「平常皆遺言」（目録No.27）

わが生存中の日ごろ言っておいたことが、みな遺言であるという。辞世の歌にも「いまはにはなにをかいはむよの常に言ひしことばぞ我こゝろなる」とあり、「つひにゆくときはきにけりのこりゐてなげかむ人ぞかなしかりける」ともある。

また、信友は長男・次男に対して、天保三年（1832）と同十三年に遺言（家訓）を書いている。膨大な蔵書や草稿類の取扱いに関し、無益に所蔵して虫に食わせたりするよりは、これを売却して、天下の同好同学のために役立てるように、といっている。

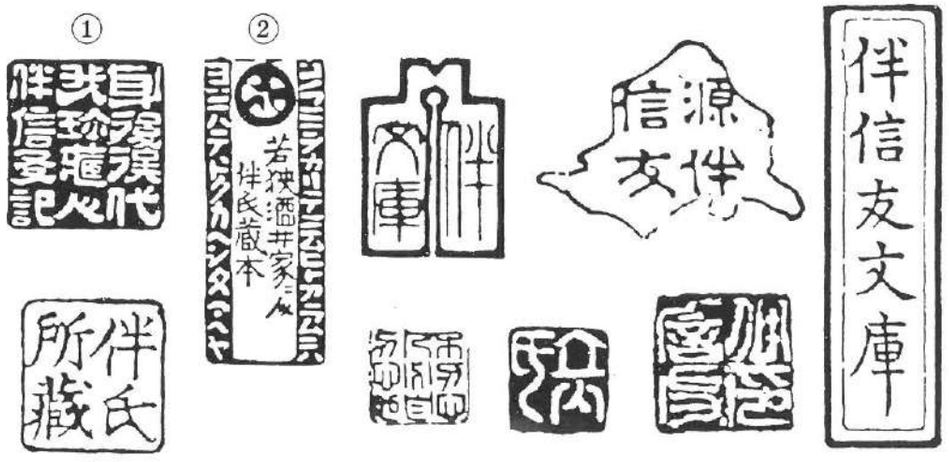


「蔵書印」

天保十三年の「書籍ニ関スル遺言」の中にも書かれていることであるが、信友の多くの蔵書印の中に、次のような興味ぶかいものがある。

①遺言に「愛し候書へは身後云々之印有ゝ之候」とあるもので、「身後俟代我珍蔵人」とは「自分の死後、私に代ってこの書物を大切に所蔵してくれる人の現れるのを待っている」との意味が込められている。

②「コノフミヲカリテミムヒトアラムニハ、ヨミハテヽトクカヘシタマヘヤ」。すなわち、「この書物を借りて見る人があったら、読み終わって早く返し給え」ということで、書物を大事にする思いが、ほほえましく表現されている。



出　品　目　録

No.	資　料　名		所　有　者（敬称略）
1	山岸氏系図	1冊	小浜市立図書館
2	押字萃	7冊	同
3	神璽三辨	1冊	同
4	東寺古文零聚	7冊	同
5	故郷百首（写本）	1巻	同
6	比古婆衣（稿本）	4冊	同
7	比古婆衣（版本）	4冊	同
8	残桜記　（版本）	2冊	同
9	正卜考　（版本）	3冊	同
10	若狭旧事考（写本）	1冊	同
11	信友和歌	1幅	本居宣長記念館
12	史籍年表（稿本）	1冊	同
13	史籍年表（版本）	1冊	同
14	愚草　（稿本）	1冊	同
15	仏神弁稿（稿本）	1冊	同
16	信友他尺牘	1冊	同
17	鈴屋翁略年譜（版本）	1冊	同
18	信友美尾夫妻和歌	1幅	楯　敏男
19	長男信近ほか宛信友書翰	1巻	同
20	百人一首（8歳の手習い）	1巻	同
21	若狭国志増補本	2冊	同
22	信友愛用の朱硯	1面	上中町教育委員会
23	仮字本末（版本）	4冊	同
24	信友宛諸家書翰	3巻	同
25	伴信友全集	5冊	同
26	信友画像	1幅	伴　信夫
27	辞世歌（平常皆遺言）	1幅	同
28	神名帳考証写本	12冊	国学研究会
29	信友一家の書	1幅	同
30	本居宣長画像	1幅	同
31	信友胸像	1点	小浜市立雲浜小学校
32	五倫教大意	1巻	同
33	信友愛用小具足	1領	福井県立若狭高等学校
34	扇面歌文	1幅	須田順蔵
35	実父母・信友書	1幅	辻　一栄
36	尋常小学修身書（巻四）	2冊	福井県立図書館
37	伴林光平宛信友書翰	1幅	西川正流

福井県立若狭歴史民俗資料館

〒917-02　福井県小浜市遠敷2-104　TEL(0770)56－0525